

第2問

次の文章は、本岡類の小説『夏の魔法』の一節である。那須高原で牧場を営む高峰は、十五年前に離婚した美美子のもとで育った息子を牧場に迎えることになった。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

跨線橋を渡って、階段を人が下りてきた。三人、いや、四人だった。ジーンズに白いシャツを着た背の高い若者が一人混じっていた。大きなバックパックを背負っていて、右手にもバックを下げている。

四つの時に別れて、息子の成長した顔は知らない。美美子からは写真も受け取っていない。が、自分の子どもだ。会えば分ると、勝手に決めていた。しかし、あの若者なのだろうか。現実を眼前にすると、確信は持てず、出迎える男はちょっと慌てた。改札口の手前で若者はこちらを見たが、すぐに視線をそらす。幸運だったのは、それと思われる若い男が彼一人だったことだ。息を吸い込み、相手が改札口を出たところで、声をかけた。

「悠平——」

若者は立ち止まり、一瞬の間があいた後、小さくうなずいて返してきた。

「よく来たな」

口が動いて何か言ったようだが、こちらの耳に聞こえてはなかった。すぐ前に、(ア)こわばった若い男の顔があった。目は見開かれているが、視線は落ちつかずに揺れている。

細面の顔たちは、俺とは似ていない。美美子の父親がこんな顔だったか——一秒に満たない間に、そんなことを思った。

「車は、すぐそこに駐めてある。一つ持とう」

手を差し出すと、むこうは怖じ気づいたようにバッグを引っこめた。行き場を失った手が宙を彷徨い、それを引っ込めてから、高峰は「行こう」と、足を出口に向けた。

ダットサンのピックアップ・トラックは、駅の横手にある無料駐車場に駐めてあった。高峰が避けて歩いた水溜まりを、若者はジーンズの長い脚で跨いで越えた。

荷物は後部座席に置くように言うと、若者はそのようにし、無言で助手席に乗りこんできた。鈍い音をさせてドアが閉まり、**A**沈黙が狭い空間の中で閉じこめられた。すぐにエンジン・キーを回して、ダットサンをスタートさせた。

東北本線と平行に走る道を少し行って右折し、踏切を渡った。あとは那須の山並みに向かって、車を走らせる。

車内にはエンジンとエアコンの音が入りこんでくるだけで、会話はなかった。「疲れたか」「東京とは違うだろ」「那須岳のほうに向かっているんだよ」——言葉はいくらでも用意してきたが、口に出したとたん場違いになってしまう気がして、高峰は黙って車を走らせた。

血のつながった親と子だ。会ってしまったえば、通いあうものがあるに違いないと考えていたのが、客観的に過ぎたのか。現実とは違って、三十センチと離れていない隣に座っているのは、容貌も自分とは似ていないし、ひどく神経質そうでも喋らない若者である。

いったん国道4号線に入り、ほどなく左に曲がった。左折する時、一瞬、助手席にいる悠平の姿が目に入った。高校野球をやっていたにしては筋肉のついていない白い腕が、美美子の言っていた彼の生活を物語っているようだった。

田舎道をさらに行くと、緩やかな上り勾配が続くようになり、エンジンの音が高くなった。正面には、那須岳の顔である茶臼岳が薄青い山肌を見せている。山のことを訊かれるのではと期待して、名前から標高一九一五メートルという数字まで用意して待っていた。東京から那須に来る者は、この場所で十人が十人、正面にそびえ立つ山塊について問いかけをしてくる。だが、隣の若者は黙ったままだ。

道の右側に荒れたサッカー場みたいな牧草地が現れた。遠くにサイロや牧舎が見え、刈り取られた牧草がいくつも円筒形に口ルバックされ、草の原に並べられていた。左にも牧草地が見えた。その時、助手席から短い言葉が聞こえた。

「牧場——」

高くなったエンジン音にかき消されそうな細い声だった。甲高くもあつた。**B**十九歳の男にしては幼く聞こえる声で、初めて耳にする成長した息子の声だった。

「そう、牧場だ。那須のこのあたりは、酪農が盛んなんだよ」

しかし、会話はつながらず、悠平が再び言葉を発したのは、その先の牧場が見えてからだつた。

「あの白くて、大きなローラーみたいなやつ」

「サイレージだ。牛が冬場に食べるよう、機械で刈り取った牧草をロール状にして、ビニールで包んだんだ。ビニールで密閉するのは、空気を遮断して、牧草を発酵させるためだ。(イ)早い話が、牧草の漬け物だ」

悠平が牧場のことに興味を持ったのかと思い、高峰の舌はつい滑らかになって、相手の五倍ほどの言葉を一気に喋っていた。

が、格別の反応はなく、助手席の若者はふたたび口を閉ざす。こちらも口を閉ざし、唾を呑みこむよりなかった。

「牛はいないの」少し行つて、思い出したように言葉が聞こえてきた。「どこの牧場にもいないし」

たしかに次々に現れる牧場に牛の姿はなく、緑い牧草が海のように広がっているだけだ。

「いるさ。ただし、牛舎の中にね。このあたりでは放牧はやっていないんだ。いや、北海道を除けば、日本では完全な放牧はま
ず行われていない。それができるだけの広さがないからな」

「どうして? こんなに広いのに」
ようやく会話がつながった。

「牛はびっくりするほどたくさん草を食べるんだ。放牧して好き放題食べさせると、草地があつという間に丸裸になつてしま
まう。だから、草は成長させてから刈り取つて干し草にしたり、配合飼料と混ぜたりして、牛舎の中にある牛に与えるんだ」

視野の端に映つた若者の表情が翳つたように見えた。都会から来た人間にこの話をする、皆いちように(ウ)落胆の顔となる。

牧場では牛たちが悠然と草を食んでいるもの――だが、それはC牛乳パックに描かれている世界であり、現実の日本ではあまり
見ることのできない風景なのである。

「しかし、うちの牧場では放牧をしている」

悠平の顔が、こちらを見た。

「自由に草を食わせてるんだ」

「だけど、今――」

その言葉には、まず小さく笑つて返した。

「まあ、見てみれば、わかるよ」

牧草が途切れた先で、高峰はブレーキを軽く踏んだ。ハンドルを切り、左に折れる細い道にダットサンを進めた。

車が一台通れるほどの幅しかなく、百メートルと行かないうちに舗装は終わつて、土と雑草の道になる。上り勾配がきつくな
つて、道の両側は草原から木立に変わり、枝の間から漏れた夕日が目を射つた。目的地に近いことを悟つたのか、助手席の若者
は再び口を閉ざしている。

毎朝、原乳を集める来るタンク・ローリーが刻みつけた轍に揺すられながら、四輪駆動のピックアップ・トラックは進み、傾

斜が緩くなったところで、高峰は道脇のスペースに車を止めた。右手には、ログハウスが見えている。

「いいだ」

サイドブレーキを引き、高峰は運転席から下りた。

荷物も下ろさず、助手席から出てきた悠平はあたりを見ている。体を三百六十度回転させ、暗さを帯びてきた周囲の木立を見
回して、口を開いた。

「どこに牧場が――」

高峰は応じた。

「Dこの山全体が牧場なんだ」

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 11 ～ 13。

- (ア) こわばった
 - ① 意地を張ろうとした
 - ② 安心感からゆるんだ
 - ③ 悲しみで我を忘れた
 - ④ 内心を隠そうとした
 - ⑤ 緊張でかたくなった
- (イ) 早い話が
 - ① 急いで説明を切り上げれば
 - ② 新しい情報に基づけば
 - ③ 早口で話すようにすれば
 - ④ わかりやすい例を挙げれば
 - ⑤ 要点を手際よく言えば

- (ウ) 落胆の顔
 - ① 予想が外れてびっくりした顔
 - ② 気力をなくしてぼんやりした顔
 - ③ 期待が裏切られがっかりした顔
 - ④ 意外な展開にはらはらした顔
 - ⑤ 絶望感で気がめいってしまった顔